

すずめの巣

小川未明

青空文庫

ある日のことひです。孝吉こうきちが、へやで雑誌ざっしを読んで、夢中むちゆうになつていと、

「孝吉こうきちは、いないか。」と、おじいさんの呼よばれる声こゑがしました。いつもとちがつて、なんだか怒おこっているようです。

「はてな、どうしたんだらう。なんにもしかられる覚おぼえはないのに。」と、孝吉こうきちは、思おもいました。

「はあい。」と、返事へんじをして、おじいさんのそばへいきました。

「おまえは、私わたしの大事だいじにしているらんの鉢はちを倒たおしたらう。」と、眼鏡めがね越しにじつと顔かおをにらんでおっしゃいました。孝吉こうきちは、知しらないことですから、

「らんの鉢？」と、答えました。

「知らないことがあるものか。おまえよりするものがない。」と、おじいさんは、あくまで孝吉がしたと思つていられます。

「あれほど、植木台へ上つてはいけないというのに、いつもあすこへいつて、おまえはいたずらをしている。」

孝吉は、よく屋根の植木を並べてある台の上へ出ます。なぜなら、あすこはよく日が当たつてあたたかであるし、また遠方の景色が見えて、なんとなく気分が晴れ晴れするからでした。けれど、おじいさんの大事にしている植木鉢などに一度だつてさわつたことはありません

「僕、ほんとうに知りませんよ。」

「おまえは、昨日きのうであつたか、あすこへ出でてなにかしていたらう

。」と、おじいさんはおつしやいました。

「昨日きのう？」と、孝吉こうきちは、考かんえました。ああそうだった。もう春はる

がやってくるのだと思おもつて南みなみの方ほうの空そらをながめてみると、うす桃もももいろ

色の雲くもがたなびいており、そして、その下したの方ほうに、学がっこう校おほの大

きなかしの木きの頭あたまが、こんもりとして見みえたのでありました。

「重しげちゃん、ここから、学がっこう校おほのかしの木きの頭あたまが見みえるよ。」と、

ちようど外そとに遊あそんでいた重しげちゃんに知しらせました。

「ほんとう？」

「だれが、うそをいうものか。」

「僕ぼくも上のほつて見みていい？」と、重しげちゃんがいったから、孝吉こうきちは、

おじいさんに、植木台へお友だちを乗せてもいいかと聞くと、おじいさんは、らんや、おもとが並べてあるし、ぼたんのつぼみにでもさわるといけないからと、お許しにならなかつたのでした。「重ちゃん、原つぱへいつて、ボールを投げて遊ぼうよ。」と、しかたがないから、下を向いていったのです。

「ああ、そのほうがおもしろいや。早く孝ちゃん、いらつしやいよ。」と、重ちゃんは、いいました。それから、二人は、原つぱで、ボールを投げて遊んだのでした。ただそれぎりであつて、自分分は、植木になどさわらなかつたのでした。

「きてごらん。」と、いわれるので、おじいさんについて屋根へ出てみると、なるほど、らんの砂や土がこぼれて、あたりにちら

ばっています。

「おかしいね。」と、孝吉こうきちも、頭あたまを傾かたむけました。お母かあさんでなし、お姉ねえさんでなし、だれだろう？

「べつに、鉢はちをころがしたのででもないな。」と、おじいさんは、らんの鉢はちを手てに取りと上げてあいられました。

「おまえが、棒ぼうでもふりまわして、その先さきが当あたつたのだろう。」
 「僕ぼく、なんで棒ぼうなど振ふりまわすものか。」

「いや、だれでもいい。こんどしたら、おじいさんは許ゆるさないよ。」と、新あたらしい土つちを、らんの鉢はちに入れていられました。

翌朝よくあさでした。まだうす暗ぐらいうちから、屋根やねですずめがチユン、チユン、鳴ないていました。

「そうだ、すずめかしらん。」と、孝吉は、思つたので、そつと床から起き出て、雨戸を開けて見たが、もうすずめの姿は、見えませんでした。

その後、だいぶたつてからです。学校の運動場で、孝吉や、ほかの子供たちは、あの大きなかしの木の下に立って、話をしていました。

「この木は、いくつくらい、ボールを食べたろうね。」

「僕たちの、投げただけでも、三つくらい食べているよ。」
枝葉がしげつていて、この木の中へ投げ込まれたボールは、ど

こかに引つかかるとみえて、それぎり、下へ落ちてこなかったの
でした。そして、孝吉が、屋根の植木台から見たのは、この

木の頂きいただきでありました。それが、春はるになって、葉はが変わかつたらしく、
だいぶ枝葉えだはの間あいだがすいて見みられたのでした。

「あつ、あすこに、ボールがのつかっている。」と、一人ひとりが指さすと、

「あすこにも、黒くろいものがある。あれもそうらしいね。」と、またほかの一人ひとりが、いいました。

「よし、僕ぼく、登のぼっていつて取とろうや。」と、勇ゆう敢かんで、元げん氣きで、
木登きのぼりの上じょう手ずな小田おだがかしの木きに上のぼりはじめました。小田おだは、
下したの太ふとい枝えだに乗のつたとき、

「おい、だれか、棒ぼうを持もつてきてくれよ。」と、叫さけびました。孝こ
吉うきちはすぐ走はしつていつて、小使こづかい室しつのそばに立たてかけてあつた竹たけ

ざおを持つてくると、小田は、それを木の上から受け取つて、

「いいかい。落とすよ。」といつて、一つ、二つ、三つとボールを落としました。

「こんど、すずめの巢を落とすよ。」といいました。

「えつ、すずめの巢？」と、みんなは、上を見ていると小田は、さおを伸ばして、頂についている丸いものを突き落としました。

「わあつ。」と、いう声がありました。しかし、もう小すずめは、巢立っていませんでした。

「なんだ、水ごけが出てきたぞ。」

孝吉は、おじいさんが、らの根本に巻いておいた水ごけだと、すぐわかりました。りこうなすずめはやわらかな水ごけの上

へ卵^{たまご}を産^うんで、育^{そだ}てたのでありました。はじめで、いつかのなぞ
が解^とけたけれど、孝^{こう}吉^{きち}は、すずめをにくむ気^きになれなかったの
であります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「すずめの巣《す》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すずめの巣

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>